2024年1月8日（月）電波新聞

FPGA第2世代の製品拡充

生成AIの普及に対応 RISC―Vプロセッサー搭載

米エフィニックス

FPGAを手掛ける米カリフォルニア州のベンチャーEfinix（エフィニックス）は、第2世代「Titanium」で、新たに「Ti375」を開発、サンプル出荷を進めると発表した。集積度を3倍に高めつつ、電力・性能・面積（PPA）で優位性を維持。RISC―Vプロセッサーを実装するのも特徴だ。

チェン社長兼CEO

同社はアーキテクチャーをゼロから見直し、パフォーマンスを落とすことなく低電力・高効率・コスト効率の良いFPGAを提供することを目的に、2012年に米カリフォルニアで設立された。

製品群として、第1世代Trionと第2世代Titaniumがある。前者は低価格・低電力な汎用（はんよう）用途に加え、MIPI CSI2やDDR3コントローラーを内蔵したラインアップもそろえる。後者は16ナノメートルプロセスを採用し、さらに高性能、高集積、低電力なハイエンド向け。

生成AI（人工知能）を含め、チップのカスタマイズの需要が高まる中で、低価格で高パフォーマンスのFPGA、汎用品などのニーズが高まっているとみる。

新製品で、エッジAI（人工知能）、車載、ヘルスケアなど多彩な展開を想定する。同社は数年以内の米ナスダック市場上場を目指している。資金調達を通じて新製品拡充などを見込んでいる。

同社の製品は日本では、加賀デバイス（東京都千代田区）などが代理店として取り扱っている。加賀デバイスは先にあった「EdgeTech+2023」でも、エフィニックス製品を柱に訴求した。

◇

サミー・チェン社長兼CEOの話 マイコンの置き換えを含め、アフォーダブル（手の届きやすい）製品の開発を進めている。オープンソースのアーキテクチャーであるRISC―Vを使っているのも特徴だ。生成AIの普及でデータ量がさらに増える中で、エッジでの処理のニーズが高まっていることにも対応できる。カスタマー課題の助けになるよう、新しい時代に適した開発環境サポートを提供する。

製品のロゴ